

「地域の宝」巡る拠点へ

遊

—asobu—

JR札幌駅から車で70分。道の駅石狩「あいろーど厚田」は、小樽と稚内を結ぶ通称「オロロンライン」沿いにある。

厚田の歴史といえは「ニシン漁場」と「北前船」。「あいろーど」の「あい」は、北前船の上りの順風「あい風」にも由来し、厚田に幸せを運ぶ風だ。

日本海を一望する3階建ての施設には、北前船到着時の人々の喜びを再現した人形のジオラマや、大漁業者として名をはせた佐藤松太郎、戦後活躍した美形の第43代横綱・吉葉山、さらに座頭市シリーズで知られる作家・子母沢寛ら、郷土出身の著名人を紹介

おでかけ 道の駅

あいろーど厚田

「あいろーど厚田」から徒歩10分圏には、夕日の名所「恋人の聖地」があり、その日に水揚げした魚介を直売する「朝市」が立つ。店は10月中旬までの毎日午前7時からで、今の時期はカレイ、ソイ、タコなどが主役だ。道の駅の浜側にある売店「アネックス」では、石狩の海鮮を詰めた「いしかり丼」などが人気だ。



日本海に沈む夕日を楽しむカップル客（アネックスで）



館内には、北前船が往来した頃の生き生きとした人形のジオラマが並ぶ

するコーナーがある。家族連れらでにぎわう1、2階のフードコートには、厚田産のそば粉とニシンで評判の十割そばのほか、地場産ソーセイジやタコを使ったパン・ピザ、ニシンとカズノコのバッテリーも。4月27日のオープンからわずか1か月余で、来館者は厚田の住民の何と100倍の20万人超えを記録した。

「厚田は『地域の宝』であふれている」。道の駅を仕切る吉田和彦駅長(60)は、かつてエアドゥの専務を務めていたという異色の経歴。「外の目だからこそ、この土地の魅力がわかる」と、客の目線でもてなしに力を入れる。来年には旅行業者として登録し、人・モノ・歴史文化財をめぐる体験型観光地としても発信するつもりだ。国土交通省は地方創生の拠点になる

として「重点道の駅」に選定。吉田駅長は「道の駅を中心に周辺を巡ってもらい、豊かな食と景観、文化を楽しむ人の流れをつくりたい」と笑顔で話した。(中西利成)



日本海に面した高台に立ち、多くの来館者でにぎわう